



# とびっくす No.35

(本誌はホームページでもご覧いただけます。 <http://www2.pref.shimane.lg.jp/suigi/> )

## 中海のサルボウガイ復活を目指して！

宍道湖の東側に位置する中海は淡水と海水が入り混じる汽水湖で、その面積は国内で 5 番目に大きい湖です。かつて中海では汽水域に生息する魚介類やアマモ、オゴノリといった海藻(草)類が豊富で、中でもサルボウガイ(地方名:赤貝)は中海を代表する二枚貝でした。そりこ船という小船を左右に揺らしながら貝桁網を曳き、船一杯になるほどのサルボウガイを漁獲し、全国一の生産量を誇っていました。また、当時は天然採苗により種貝(稚貝)が採取され、親貝だけでなく多くの種貝も県外に出荷されていました。しかし、その後の環境変化によりサルボウガイは激減し、今や“幻の貝”と言われています。ところが、最近になって漁業者からサルボウガイの親貝が「刺網の網を噛んで揚がってくる」、「アサリに混じって獲れる」といった情報が寄せられるようになり、水産技術センターでは、平成 18 年度から中海におけるサルボウガイの生息調査、天然採苗試験を行ってきました。今回は、その中から天然採苗試験について紹介します。



### 昔はたくさん獲れていた

漁獲統計が残っている昭和 25 年以降のサルボウガイの漁獲量の動向を見ると、昭和 25~36 年にかけては比較的まとまった漁獲があり、1,000 トンを超える漁獲も見られ、昭和 30 年には最高の 1,610 トンの漁獲がありました。その後、漁獲量は急減し、昭和 40 年代は数百トン台で推移しました。そして、昭和 52 年の 2 トンの漁獲を最後に統計上、漁獲なしの状況が続いています(平成 8 年に 2

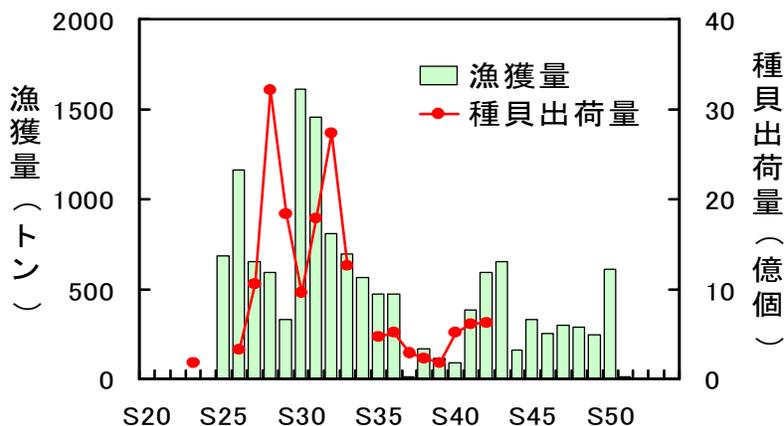


図 島根県におけるサルボウガイの漁獲量ならびに種貝出荷量の動向

トンの記録がある)。一方、種貝出荷量は漁獲量の多かった昭和 25~33 年にかけて、年間 10~30 億個の種貝を現在の主要産地である岡山県や福岡県など県外に出荷していました。しかしその後の漁獲量減少に伴い、種貝出荷量も急激に減少し、昭和 35~42 年にかけては数億個程度の出荷に留まり、その後は、サルボウガイの天然採苗も廃れていきました。

### 天然採苗へのチャレンジ

漁業者からの情報提供により、中海の一部水域で親貝の生息が確認されたことから、現在の中海においても、以前行われていた稚貝の採苗ができるかどうか検討することになりました。東出雲町

崎田鼻沖と八束町遅江沖の2ヶ所に採苗器（種貝をとるための網）を設置し、天然採苗試験を行いました。採苗方法は、かつてイタヤガイ稚貝の天然採苗を行っていた時の手法を採り入れ、定置網などの使い古しの網をタマネギ袋やニンニク袋の中に入れ、それを海中に漬けておくだけという至って簡単な方法です。そして、いつ、どの水深帯で多く取れるのか調べるため、毎月採苗器を回収して、付着状況を調べました。



図 採苗器設置場所

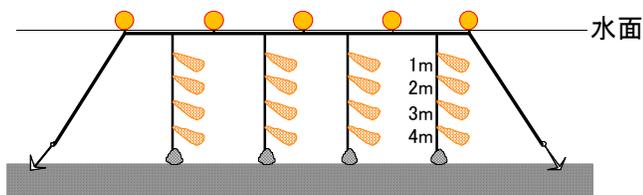


図 採苗施設の概略



図 使用した採苗器

### 採苗器はいつ垂下すれば良いのか？

効率良く、たくさんの稚貝を得るためには、いつ、どの深さに採苗器を設置すれば良いか把握しておく必要があります。また、中海にはサルボウガイと同じように物に付着する性質を持つホトトギスガイという厄介な二枚貝が生息しています。実はこの2種の貝の産卵期は一部が重なり、設置時期を間違えるとどちらを集めているのか分からなくなります。

そこで、今回はサルボウガイの浮遊幼生が出現すると考えられる7月からほぼ1ヶ月おきに採苗器の設置、回収を11月まで行い、付着稚貝の出現状況を観察しました。

今回は2ヶ所とも8月に設置したもので多くの付着稚貝が得られ、特に崎田鼻沖では各水深毎に設置した4袋で約9,000個の付着稚貝が得られました。また、付着稚貝の採集状況より、崎田鼻沖では8月に集中して幼生が出現し、遅江沖では8月を中心とした7月から9月にかけての長期にわたり幼生が出現していると考えられました。

このことから、現在の中海においては、8月から9月にかけて採苗器を設置すれば確実に付着稚貝を得ることが可能であるということが分かりました。

では、どの深さに採苗器を設置すればより多くの稚貝を採集できるのでしょうか？水の中の生物ということで海底に至るどの深さにも幼生が浮遊していると考えがちですが、実はサルボウガイは塩分濃度の影響を受け、ある深さにまとまって分布する性質を持っています。そこで今回は付着

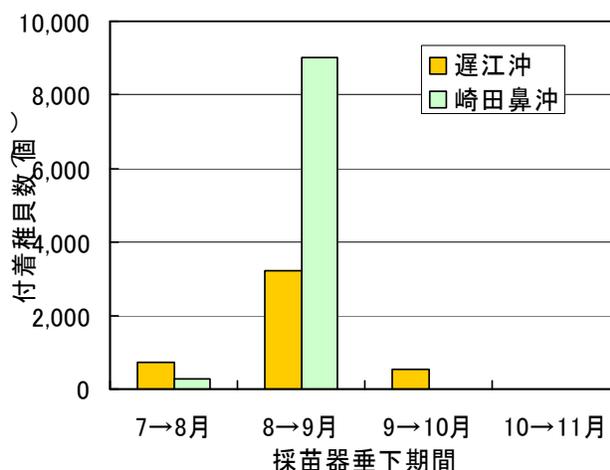


図 付着稚貝の月別出現状況

稚貝数が多かった8月に設置した試料により水深別付着状況を見ました。

崎田鼻沖では、水深3mでの付着が他の水深帯に比べ圧倒的に多く、この水深帯に高密度で分布していたこと分かります。また、遅江沖では水深1~3mの広い範囲において付着が見られ、表層から中層にかけて分布していたことが推測されました。また幼生の分布の違いについて、遅江沖では旧中浦水門が近いこと海水の出入りが大きく、塩分濃度が低くなりやすく

いことが、一方、崎田鼻沖は宍道湖からの低塩分水や中海湖心に発生する貧酸素水塊の影響を受けやすいため、ある水深帯に高密度で分布するのではないかと考えられました。

このことから、どちらの場所でも水深3mを中心に採苗器を設置すれば、稚貝の採集が可能と考えられました。但し、水環境（水温、塩分、溶存酸素など）というのは常に同じではなく、年変動や季節変動が大きいため、今後、天然採苗を成功させるためには水質調査を行い、より適した条件を把握することも重要なポイントになります。

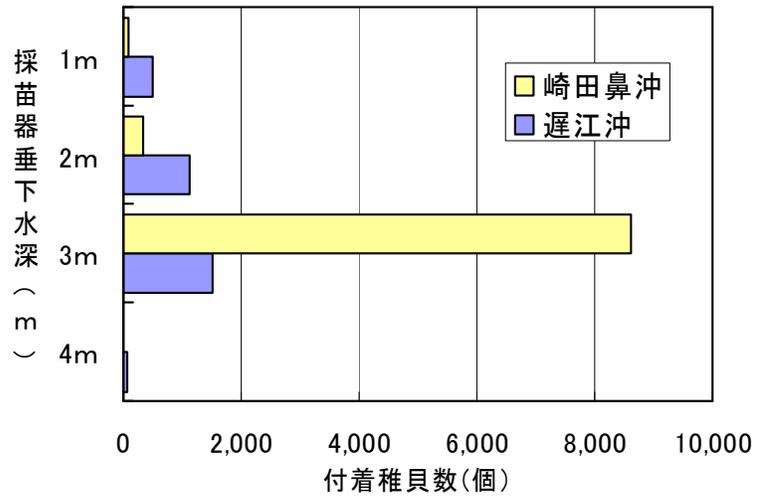


図 付着稚貝の水深別出現状況



付着しているサルボウガイ稚貝



### サルボウガイの復活を目指して

今回の調査から、現在の中海においてサルボウガイの天然採苗は十分可能であることが分かりました。また、一部の水域では僅かではありますが親貝が確認されています。しかし、今回、稚貝の付着数が多かった崎田鼻沖では親貝はほとんど確認されていません。すなわち、『今の中海では卵を産むことが出来る環境だけでも、育つ場所がない』といった状態です。

現在、中海では本庄工区の西部承水路撤去、さらに今年度は旧森山排水機場跡地埋設パイプの開放、森山堤防の開削工事など中海の環境、特に水質環境が大きく変わることが想定されます。さらに、新たな動きとして島根県、鳥取県、島根大学による共同調査も動き出そうとしています。

庶民の味の復活を目指し、少しずつではありますが関係機関が協力しサルボウガイ復活に向け動き始めました。しばらくの間、サルボウガイの動向から目が離せません！

島根県水産技術センター 島根県浜田市瀬戸ヶ島町 25-1

TEL:(0855)22-1720 FAX:(0855)23-2079

ホームページ: <http://www2.pref.shimane.lg.jp/suigi/>

E-mail: [suigi@pref.shimane.lg.jp](mailto:suigi@pref.shimane.lg.jp)